

弓取町人

泉鏡花作

一

「もし、佐野屋の旦那。」

「何うした、關取。」

「關取なんて言ひツこなし。あれ、だから歩行振まで、のさり／＼と氣取るぢやありませんか、可恐しい。」

會津若松の城下を、八月十二日の月夜に西の方を指して三人連、佐野屋の旦那と呼ばれたのは邊の小間物屋の主人で、質素な中形の浴衣に博多の帯、白麻の襯衣を着て居る。關取は名を東山といふのであるが、敢て番附面の何段目を取るといふ凄いのではない。大町の町盡に土藏附茅葺の大家、小作を取つて居る田地持の次男で、小力があつて、宮角力の土着かず、今日の大關に合ふ作太郎といふ壮漢。白黒段々染の浴衣を筒袖にして、づんぐりした身に絡ひ、縮緬の扱帯を前結にしてゆさり／＼、故と太い聲でものをいふ。いま一人は白襯衣、紺飛白紺足袋で、

むぎわら 麥藁の帽を戴いた、市役所の月給取で、いづれも丸
じゅうち 重樓とい、遊女屋の裏の空にある大弓場金的の定
つら 連である。

此の月給取、小此木が眞先で、

「可うです些と急がうちやありませんか、外へ
行くんぢやありませんからね、晩になるとお城の
中是不氣味でさ。」

佐野屋は背後から笑を含んで、

「何、先生、それといや關取が居まさ、其處は安
心ですよ。」

「はい、私が附いて居りや、旦那方に怪我はさ
せませぬ。」と生ぬるく引張つて、けだるさうなも
のいひを遣る。

小此木は苦い顔して、

「佐野屋さん。」

「へい。」

「貴方が又何もやけに、關取なんておつしやるこ
とはありませんや、其でなくつてさへ、作の野郎、
氣取りたがつて、うづ／＼してる處へ、水をお向け
なさるもんだから、何うです彼の聲は。」

「そりや不承してお遣んなさい。おなじ甚句だつ

て藝者のと角力のは丸で以て音色が違ひまさ、破太鼓のやうな聲を出す處が角力取にやあ貫目さね。

いくらお耳障でも到底清元や二上のやうな、意氣な音が出るもんぢやありませんから、職業に免じて其處は聞流してお遣なさいまし。」

「やあ、役場の先生、こりや唯今旦那のおつしやる通りでござんす、お聞辛かるが御免くだあれ、其代にいざとなりや。」

關は往來で仕切の身構。柏手を丁と打つて、

「狐でも狸でもお茶の子でござんすわい。」

小此木は興の覺めた風をして、

「不可、もう我輩ものいはずだ、情無い。」といつて急足になる。

やゝ小半町、皆黙然で歩行いたが、忽ち思ひ出したやうに一齊に吹出した。

「はゝゝはゝおい、作さん、何しろ大丈夫かね、君は力はあるだらうが、化物は何も逆におんぶをして急所を狙ふと極つてやしないぜ。其に武藝の達人かして、可恐しく弓が上手だつたといふぢやあないか、飛道具で遣られた日にやあ、如何に君だつて一堪もありやしまい。」と小此木は氣遣ふ様子、佐野

屋は事もなげに、

「其處へかけちやあ鍛へてあります。何、小此木さん、若湊のヨイシヨコラでも、うむと張つて撥返さうといふ胸だ、半得の一枚肌、胸板は伸金のやうですから、化物の外矢なんざ突通る氣遣なしさ、ねえ山關取。」

と又しても人の悪い。

作太郎さくたろう關かんは之これを聞きくと有ゆう為いかほ顔かほに丁ちやうと胸むねを叩たたいて、
又また力りき足を踏ふみ張ぢやうつた。

「これだ、はあ、之これだ、矢やでも鐵砲てつぱうでも持もつて來きい、案あんずることはござんせんわい。」

丁度ちやうど士し町ちやうに掛かつて人ひと通とほがなく、誰だれも見みる者しやがなかつたけれども、關取せきとりが此この容やう子こを見みたらば噴飯ふはんせずには居いられまい。

然しかるに一いっ行こう三さん人の段なく、いざとならば矢表やあらに立塞たつふさがらうといふ關取せきとりの背うしろ後ごを少すこし放ほうれて、一切いっさいを見みつゝ聞ききつゝ片類かたほか笑わらもしないで、澄すして眼まなけて居いる一人ひとりの婦人えとがある。

佐野屋さのやは見向みむきもしないで居いたが、關取せきとりが今いまの矢やでも鐵砲てつぱうでも持もつて來きいで、胸むねをどんが、餘あまり仰あふ々々しかつたから、何心かこころなく振返ふりかえると不圖ふと其姿そのすがたが目めに留とままつた。

恚かう月明げつめいに透すかすと、件くだんの婦人えとは、背うしろ後ごへ影法師かげぼうしを曳ひいて、一いっ行こうと齊かししく東山ひがしやまの月つきに向かうつて歩あゆを移うつすので、白銀しろがねのやうな艶々あでしき薄煙うすけむりのために、少すこしばかりだけれども、間あひを隔へだてられて判然さつぱりとは見定みさだめら

れず、茫然と白く、くつきりと黒く、浴衣に羽織でも襲ねて居ようと思はれる、すらりとした風。

佐野屋は之を、丁度關取の肩越に頤を上げるやうにして見つけたが、何氣なく、又歩き出した。

「小此木さん。」

「え。」

「串戯は止して、淋しうがすな、未だ宵の口なんでせうね。」

「此頃ですから最う其でも十時にやあ成りましたらう。一體、用のある處ぢやあないんで、夜になつて此處等歩く者はありませんや。」

「然やうさ、考へて見たつて、私どもは土地兒なんだけれども、月明にお城の道筋を通つたこと

なんざあありませんからね。謂つて見りや物好さ。と又一寸と皆を見ると、婦人の姿は近寄らず、敢て遠退もせぬ。

「で、何ですか、其の金的へ顯れたといふのが、宇賀神堂の中の何の神様にか面影がそつくりだつたといふが本當なんで？」

宇賀神堂は飯盛山の頂にある、二間四面の阿彌陀堂で、永徳年間、今より五百二十餘年前の建築であ

るが、近きころ、傍の榮螺堂から、彼の白虎隊が、
劍を提げ、戈を横へて、匕首を按じ、

或は小手を翳し、或は足を躓てなどした、いづれも
黒髪を亂して、白の顛卷、裁着袴、武者草鞋の、身
輕に申斐々々しく武装した、おなじやうな白面朱唇
の美少年の、衣の色まで彩色した彫像の數十人を、
此處に移して安置した其である。

何人か此處に其の神の俤が肖たかといふのを、佐
野屋は聞きもあへず、

「そりや確です。喃、關取。」

關取は相變らず、人困らせの難澁な聲をして、

「はゝい、私も見ましたで、疑はごんせんがい。」
小此木は之を聞いて長歎した。

「あゝ、助からない。」

「もし、場所柄ですから、気障なことをいひっこ
なし。」と佐野屋の擔ぐにはいはれがある、背後の
婦人。

「一寸。」といつて、小首を傾けながら間近に見
ようとして後へ温つた。

關取は然りとも知らず、

「はゝあ、徐々おん前達でござんすかい。」との

はゝんで前へ攀／。

佐野屋は立留つて、ト透かしたが、丁度女の顔の
あたりは、黒板塀の陰になつて、胸から裾へかけて
唯これ、すつきりと水が重りさう。

婦人の姿は放れず、去らず、今も相變らず見え隠れであつた。

「おい。」といつて、佐野屋は又入交つて關取の前へ出ながら、

「小此木さん。」

「えゝ。」

「何時でせうな。」

「はあ、矢張り十時頃でございませうよ。」

「然うですか。」とばかりで何か調子まで沈んで来た。

「十時が一時でも可うごんす、東山が居りますで。」

佐野屋は慌てたやうなものいひで、

「關取、文句を言はないで一寸背後を見な。」

「何でごんすぞい。」

「可いさ、ごんすでもざんすでも構はないから、關取、振返つて見ないか。否さ、お前、人間なら一寸背後を見られるかい。」

「背後がどないでごんす。」

「何大したことでもないがね、小此木さん、一寸、」といつて、佐野屋は小刻に縋るが如く、前へ行く男に引添ふと、關取は、今ものありげに言はれた背後を振向かうとして立停つたが、俄に怖氣がついて首の骨が固くなつたので、怪訝な顔を眞正面に据ゑながら、口ほどもない、ひよこひよここと走寄つて、

「何だね、旦那え？」

「様あ、到頭本音を吹いた。」と小此木は打棄るやうにいつたが、恚る中にも極めて眞面目である。

「關取、何でも可いから、後生だから、まあ振向いて見るさ。お頼だ。」

と催す佐野屋の傍に立つて、關取は右左を胸したが、背後へは首が廻らず、きよる／＼して、

「何うしたんだね、何がだよ、旦那、をかしいな。」

「をかしなあ無いよ。ふん、憚りながら、これ、ものがをかしいやうな事なら、心配はしないけれども、何うだね、見る氣はなしか。何、生命に別條はないだらうが、」

「何だつて、旦那。」

「餘り心持の可いものぢやあないよ。小此木さん、變に恚う魔がさしたやうですが、何なら今夜は見合せませうかね。」

と佐野屋は大方ならず怯えた様子、小此木もまご／＼して、「其も琴フですが、だつて何でせう、一件は其の跟いて來るといふんぢやありませんか。引返す途端に鬼になつて、ばあ、なんざ下さらないね。私もぞく／＼して、顔がもうこれより背後へは向かないんで、貴方又下らないことを云出したもんだから、」

「否、全くだから仕方がありません。私は矢張振向くのは少時御免だ。關取、」

「はい。」とまじ／＼して、何か急に鹿爪らしくなつた。

「お前何うだね、矢でも鐵砲でもぢやあないか。」

おい、東山がついてるんだぜ。」

「へ、旦那、串戲をいつちやあ不可ません、そんな事を聞くが最後、先方ぢや私ばかりしを目壺に取りまさあ。」などといふさへ、怪しいものが聞かうかと、密々聲で、三人とも月下に影を小さくして疎んだが、やがて小此木が立直つて、

「男だ、此處まで来たものを一番お城まで遣つけませう。一體お話の様子ぢや我々は神慮に合つて、其處でお姿が、顯れたといったやうな譚なんですから、途中で怯氣が出るやうぢや、お見限を蒙らうも知れない。とまあ云つたやうなもので、ふとすると其うしろの一件で度胸のはどをお探りなさるのかも灯れませんか。ですから、兎も角も行くことにしようぢやありませんか。」

「御尤もで、」と言葉まで慇懃な、佐野屋はいゝ年紀をしながら、意見をされて畏つたと云ふ形である。

四

さて三人は、いよ／＼若松域に向つて進むことになつた。早や此處からは遠くもない、唯一點の灯もなく、月明で星さへ見えぬ前途の空に、一帯地平線上に白氣を籠めて、すく／＼と目に遮る黒い桂は、これ即ち外廓の松の樹立である。月の隈は唯其ばかり、顔を見合す人々の瞳も見えて眞晝のやう。

「傘あ！」と關取が呟いた。いづれも理に沈んで默然の處、佐野屋は吃驚して、

「何だ。」

「傘だ。」

「傘が何うしたと 又不思議なことを言出す

ぢや無いか。つまゝれ染た、何のことだ。」

「傘かね、」

「これさ。」

「えゝ、傘あ。」

「あれ！ 背後の方から變になるぜ。」

と寂しい聲をする。小此木は苦笑して、

「唄の出損ねなんでさあ、野郎、震てるから調子

が出ないんですよ。關取おい、しつかりしないか！」

「傘！」

「そら来た、（手に持ち

佐野屋の旦那、一

番景氣をつけませう。」

「なるほど、其で落着いた：（皆さん然らば）

とかね、」 「やれこの、のんのこさい／＼、は／＼

は／＼、」と小此木は元氣づく、關取も勇をなして、

「然らばお先へ、やれこの、参りますぞえ。」

三人が、

「のんのこさい／＼。」

恠く一行が夜道を侵して七日町から出て来たのは、

次に説く如き仔細があつたのである。

一體、此の三人に限らず去年の夏あたりから開業し

た九重樓の裏の大弓ノ二、一こ。

壮なる土地の人氣に合つて、目覺しく繁昌する。中

にも此の佐野屋といふのは、金子が廻つて世話焼の

上に大の横好で、毎夜詰切の上華主。近頃同好の人々

を語らつて、武道長久、弓術の上達を祈るため、堅

帽子で引く連中出合ひで、白木の弓に大鳥の羽の四

ツ矢を添へて、之を一國の粹として、他に誇れる、

十九の神將、彼の白虎隊の彫像を安置した宇賀神堂

に謹上再拝と奉つた。

其が神慮に合つたやうに各々が思ひなしてか、一人に勘が出た。然るに、此度舊藩主某侯の息女、竹姫といつて御年二十にならせらるゝ、豫て心ざま雄々しく、絲竹の調よりも、却つて國家の軍事に耳を傾け給ふ由、學校の運動會には、婦人財囊を寄せられるので、牛打つ童まで知つたのが、疾より然る近衛の將軍と縁組が定まつて愈今年天長の佳節、白菊を清けた電燈の目映い館で式を擧げることになると、御名殘傍々一度故郷を御見物といふ觸で、一昨日から此の若松に来て逗留あり、有志團體が思ひ／＼の趣向を凝して、壮に歡迎する中に、金的の定連も祝意を表して、幕を張り、水を打ち、軒には鬼灯提灯、庭には篝火、射場に氷水の硝子杯を取寄せながら、射割だ、金的だと取替へ引替へ前へ寄つた、落ちた、背後だ、引摺つた、南無三寶幕を射た、イヨ當りなぞと、笑ひ動揺いて鼻息の荒い天狗連、別けて此の三日、殊に今宵は、奇つて集つて射たわ／＼。

さんばんさんぜんさんびやくじゅうさん
 三萬三千三百十三さるほどに少しも中らず、ほつと
 して連中一呼吸を吐いて居る處へ、ぶらりと入つて
 來た一個年若き人物があつた。眉目俊秀、中肉中脊、
 質素な單衣に紹の紋着羽織、麻襦袢、自足袋で、品
 の可いきりゝとした風。

此の邊につひぞ見掛けた事の無い人柄であつたが、
 片肌脱、又は大肌脱、中にはいきり立つてやけに向
 う顛卷をしたのなどが、瘦せた小角力が並居る形で、
 團扇と、扇子と、氷の硝子杯と錫の匙と手の上げ下
 げに入亂れた定連へ、靜に目禮して四分五厘といふ
 弓を撰び、押手に取つて矢筒を引寄せたから、何を
 外矢め、今に弦の中から尺五を覗いて、耳を引拂ふ
 のが落だらうと、目と目に冷笑を帯ひて流眇にかけ
 て居たのである。

來客は射前も見事に、はじめは正面の尺五の的へ
 十と射あてて一筋もそらさず、矢筒を取交へると大
 前の射割を狙つた。いづれも屹と瞳を据ゑると、上
 下を挟んで二矢を外したから、然もあらむと定連が
 顔を見合せて北叟笑をする。

途端とたんに弗ふと射いた、矢響やびびとともに射割いは燈あかりと碎くだけて散さんつた。續つづいて其次そおすがら、又其次またそすがら、尺五しゃいつの的まとを眞中まんなかに挟はさんで、前後あとさきに四枚よんまいあつたのが、弦鳴げんなに應おうじて、菱形ひしがたの板いたは恰あたかも雪ゆきの消きゆるが如ごとく、力ちからチリ、颯さつと碎くだけて、木屑きくずも残のこらず、あづちばかりが黒くろくなつた。

來客ききやくは其そのまゝ射いがけを脱ぬいで指置ゆびおいて、帳場ちよつばへ勘かんぢ定やうを置おくと、後うしろを振向ふりむきもしないでふいと出でたが、大弓場おほゆづりばへ入はいる路地ろぢの角かど、九重樓きゅうじゅうろうの土藏つちくらと合あの角かどに成じやうつて居いる、蛇くちなはの目鯨もくすしの看板かんばんを横切よこきつて、七日町なのかまちの通かよへ出でたと思おもふと見えなくなつた。

先刻さきから呆氣あつげに取とられて居いた連中れんちゆうが、俄にはにわやくと動揺どうじゆうきはじめ、何なんだ、誰たれだらう、何處どこの者ものだと、皆みんなが口々くちぐち。待まちねえ、といふが疾といか、駈出かけだしの勘かんす次がらといふ、ポンプの筒先つつさきが身輕みがるに躍をどり出した。

やゝ暫しばしく其噂そのうわさの止とまない處ところへ、呼吸いきを切きつて駈かけて歸かえつたのを、取卷とりまいて、何かうしたと聞きくと、不ふ思議しだい！ はての、送中おくちゆうで消きえて了しまつたかい。いんえ。ぢや、些少せしやうは妬やけたのか、何かをいやあがる、恚かう馬鹿ばかにしちやあいけねえ、彼かれあ唯者たしやでねえぜ。何な故げだといつて、ずん／＼お城しろの中ちゆうへ入いつて行いつた、といつたので

何お域へ入つた。彼の域社へ、今時分をかしいな、と皆小首を傾けたが、他國の者が来て見物に行つたと極めて了へば其丈のことを、何うして眞晝間日のあたる時でも、一人ぢや草刈に入らない處だ。何處に陥穴があらうも知れぬ、可恐い草原へ夜踏込むのは容易でない、一人が怪む、かと又然ういへば何處かで見たやうな立派な顔立だつた。然うだ、宇賀神堂の白虎隊の中に誰やらそツくりなのがある。違えねえ、成程、己も見た、私も見た。惟ふに此間奉納した連中の弓矢を感應あつて、中にも弓橋に長けたが、此際姿を顯した者であらう。歸道は飯盛山でなかつたのが讀めないけれども、一體城のために一命を捧げた人々であるから、魂魄は其處に留まつて居るものと見えるといふ事に極めたので、奉納を發起した佐野屋は一方ならず面目を施して、此まゝでは残多い、然ほど靈驗あらたかに在さば、城へ入つて最う市一度と、半は乗地の愉快づく、大人氣ないといふ者やら、おつくふがるものやら、中には全く不氣味で二の足の輩もあつた。そこで關取と二人。出がけに來合せた小此木は、大のものずきだから、おいそれで、到頭三人で來たのである。

「小此木さん、此から先ですよ。」

「大分何うも、」とばかりで、城の大手門の趾の、外濠を左に控へた土塀の石垣の前に立停つた。

既に白氣の中を買いた松の木的一本二本は潜つて來たので、薄は肩に擦合ふばかり、三人の身體は草の葉に隠れて、三ツの首は天窓黒く、其の薄の穂と竝んで据つたまゝ動かなくなつたのである。

「中は眞暗ぢやありませんか。」と、小此木は不氣味さうに及腰で差覗く。佐野屋は空を仰いで見ながら、「森がありますからね、此塀の上のだつて何百年経つてるか知れませんか。」

「へい、彼方から見た分にや、何の事はない、杉箸がひよい／＼立つてる位なもんですな。」

「時に何うしませう、小此木さん、一體何時でせう。」小此木は聞くと情なさうに、

「何うも君の其時間をお問ひなさる音色といふものは容易でない。何となく私あ夫を聞く度に引入れられさうになりますよ、もう遣切れない。」と溜息をする。

「え、成程いかさま其處もありますな。」と佐野屋もとつちて悄げ返つた。

關取は謂、ふまでもないが、言句も出でず、月は松の木の間から、小さな形を遠く見せて、森として風もなく市中を縦横に貫き流れる猪苗代の湖から引いた用水の音が遙に響いて凄じい。

恚る時、さら／＼といふものゝ音、三人は露が薄に上るのだと思つた。

然るに關取の直ぐ背後へすつくり立つたのは婦人である。

はツと思、ふ途端に、臆病ものべた／＼と早腰を抜かした。凡そ豫ていひ合せてする事ども、恚うは行くまい一所に蹲んで居窘まつた。關取の如きは血迷つたか、

「傘あ、」とあるか無きかの細い聲をして震へて居る。三人の前をすつと横切つたが、慄然とすると通過ぎて、後姿になつた、顔ばかり振向けて屹と見る、月は半面を掠めて片頬蒼白く、鼻筋の通つたのが、星眼を聞いて、

「皆お歸り、此處は來る處ぢやあない」ときつぱり。

其まゝ月を浴びて水の蛭るがごとく、ゆら／＼と
動いて向うへ歩を移すと思ふと、石垣に着いて大手
の暗い中へ跽音をさして鮮麗に入つたのが、はつき
り見えた。

同時に、息を凝らして居た關取りが、わーツと云ふ
と跳上つて突飛ばされたやうに、ばた／＼と舊來た
道へ逃出した、之と手も足も結へ附けてあつた如く、
小此木と佐野屋が肩を組んで一目散。

【完】